尾張猿投窯と尾北窯 ~飛鳥時代に見られる須恵器生産の様相~

城ヶ谷和広

1. はじめに

尾張は古代以来、全国的にも屈指の陶器生産国であった。古墳時代から飛鳥¹⁾・奈良時代を通じて絶えることなく須恵器生産を続け、平安時代には灰釉陶器や緑釉陶器を生産する。 文献では延喜式に年料雑器として長門と並んで「尾張瓷器」が見える。国内で初の本格的施釉陶器である灰釉陶器生産が畿内ではなく尾張で始まると言うのは大変興味深いことである。中世になると国内で唯一の施釉陶器である「瀬戸」や全国的に流通する「常滑」を生み出す。

古代尾張の須恵器・灰釉陶器生産はほとんど2つの生産地で行なわれていた。最大のものは尾張東部の丘陵地帯に立地する猿投山西南麓古窯跡群(以下、猿投窯とする)である。猿投窯は古墳時代から中世まで連綿と生産を行っており、窯の数は600基以上といわれている。5世紀中葉には須恵器生産を開始するが、開窯に当たっては技術・形態から和泉陶邑古窯跡群と別の系譜を持つ工人集団が関わっていた可能性がある。奈良時代半ばには須恵器生産を母胎に瓶類を中心とした原始灰釉陶器を生み出し、平安時代には白色の胎土を持つ灰釉陶器椀・皿を完成させる。ところが中世になると猿投窯自体は無釉で在地向けの日常雑器である山茶椀生産に転換してしまう。

尾北古窯跡群(以下、尾北窯とする)は尾張の北東部、庄内川をはさんで猿投窯の北西に位置している。今までは150基ほどの窯が見つかっているが、大きくは猿投窯の流れの中で把握されており、独自の須恵器編年研究は成されていない。生産に関してみると、6世紀前半には開窯するが、操業にいくつか中断する時期があり一定ではない。平安時代には灰釉陶器生産を行うが、古代末には終焉をむかえ、中世には生産が絶えてしまう。

筆者は大学在学中に猿投窯・尾北窯における 7 ・8世紀の窯跡出土遺物の整理に携わる機会を得たが、このとき受けた印象では尾北窯高蔵寺 2 号窯出土遺物が同時期の猿投窯の製品とは少し違った様相を持つというものであった。それはこの窯自体が特殊な様相を持つものなのか尾北窯と猿投窯との性格の差なのか、当時は 2 つの生産地の差が明確にされておらず、充分認識することができなかった。

尾北窯については、すでに瓦の研究から中央との結びつきについての指摘がなされている。たとえば、7世紀後葉の尾北窯篠岡2号窯で焼成した瓦が奥山久米寺の瓦と同笵であ

ったり? 8世紀初頭の尾北窯高蔵寺瓦窯から出土する瓦が藤原宮のものと同笵で、日高山 瓦窯で使用された笵がもたらされたと考えられていることなどである? また、尾北窯の性 格については、瓦陶兼業窯として生産を始める篠岡 2 号窯に対する須恵器を含めた中央か らの新しい技術の伝播を想定する意見4)や国衙との関連を想定する意見5)もある。しかし、 具体的に須恵器生産の面から尾北窯の性格が検討されたことはあまりなかった。

ところが、近年の調査のなかで尾北窯と中央との直接的なつながりを示す遺物が見つかった。それは数片の在銘須恵器である。詳細は後述するが、飛鳥地域から出土した須恵器のなかに7世紀末に位置づけられる尾北窯篠岡78号窯で生産された可能性が強いものが出土している。飛鳥時代に中央へ地方窯の製品が搬入されていたという確実な証拠が発見されることは極めてまれである。この製品の流れはどのようなことを意味するのであろうか。これを機に実際にいくつかの要素を取り上げ、飛鳥時代における猿投窯、尾北窯の2つの生産地の性格などについて考えてみることにする。この点をつきつめていくことで、飛鳥時代の須恵器生産の特質についても考える手がかりを得ることができるものと考えている。

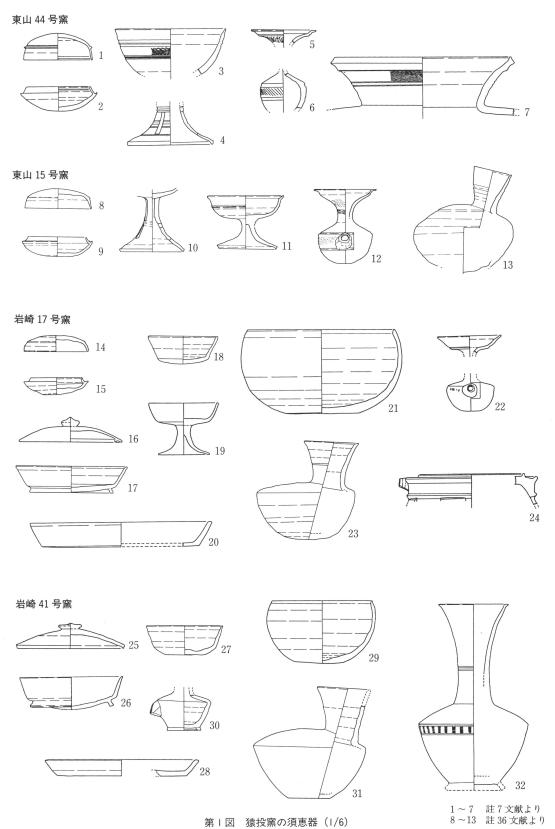
2. 飛鳥時代における須恵器生産の状況

尾張における須恵器の研究は日本窯業史研究の一つの出発点となる昭和30年代の愛知用 水工事に伴う猿投山西南麓古窯跡群の調査が行われて以来、30年以上の歳月が経過し、編 年研究もほぼ確立してきている。婚崎彰一氏らの研究で猿投窯における古代須恵器・灰釉 陶器生産は尾北窯も含めて、大きく6期に区分されている。

飛鳥時代については猿投窯編年の第 II 期の終わりから第 III 期にかけてとして位置づられる。猿投窯第 III 期はさらに東山50号窯式、岩崎17号窯式、岩崎41号窯式、高蔵寺 2 号窯式に細分される。本論では基本的には既成の猿投窯編年に従うが、若干の相違点もある。それらについてはその都度触れることとして、器種組成と形態変化から奈良時代の初めも含めて飛鳥時代を $1\sim5$ の 5 小期に区分して様相を述べる。

a. 1期(6世紀末~7世紀前葉)

この時期は猿投窯では第 Π 期の最終段階である東山44号窯式に位置づけられる。この時期までは窯は東山地区のみに築かれる。代表的な窯として東山44号窯 7 が挙げられる。器種組成は古墳時代通有のもので、蓋杯・高杯・腺・甕などが主体である。供膳形態は蓋杯である杯 Π^{8} が全てを占める。蓋の天井部には稜があり、約2分の1に回転ヘラケズリ調整をする。法量では身の口径がおおよそ $10\sim11$ cmである。高杯は長脚2段3方透かしのものである。



- 99 **-**

尾北窯では下原地区で6世紀前半に生産が開始されるが、中葉には中断してしまう。それ以来しばらく窯は築かれておらず、この時期に相当すると思われる窯は見あたらない。

b. 2期(7世紀中葉)

猿投窯で7世紀中葉に該当するのは猿投窯第Ⅲ期第1小期・東山50号窯式である。代表的な窯としては東山50号窯、東山15号窯 9 などがある。この時期の供膳具は基本的には杯Hである。杯Hの口径はおおよそ9cmで、前段階の東山44号窯の時期よりも1cm近く縮小する。高杯も見られるが透かしが3方向のものは少なくなり、2方向のものがほとんどとなる。なかには透かしが形骸化し、線状になったものもある。また、この時期より、新たにかえりのついた杯蓋、無台杯身である杯 A^{10} 。盤類の出現を見る。鉢類では底部が丸みを持つ鉄鉢形の鉢や大型の浅鉢がみられるようになる。この時期の後半になると金属器を模倣した形態の器種と円面硯がみられることに注目しておきたい。

尾北窯ではまだ生産は行われていない。

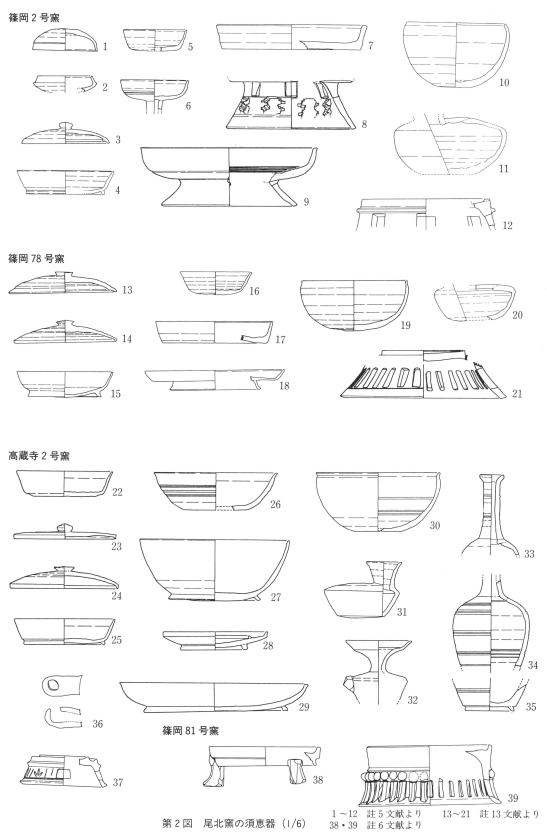
c. 3期(7世紀後葉)

積投窯ではこの時期に含まれるのは岩崎17号窯式である。代表的な窯は岩崎17号窯である。この時期より器種構成がかなり豊富となり、1つの器種で法量分化が見られるようになる。供膳具では杯Hは口径約8cmと最少のものとなり、蓋受けのかえりも形骸化する。数量的にもごくわずかなものとなる。これにかわって主体となるのはかえりのついた蓋である。身としては、杯Aに加えて有台杯身である杯Bが登場する。杯A、杯Bは器高の浅いものと深いものの2種類にわかれ、それぞれ口径による器種分化が見られる。鉄鉢では底部の尖った形態のものが出現する。平瓶の肩が鋭角的になってくる。実年代としては7世紀後葉が考えられる。さらに古相と新相の2つに分類が可能であると思われるが、今回は編年が主題ではないので別の機会に述べるつもりである。

尾北窯はこの時期になって操業を再開する。窯が築かれるのは篠岡地区で、代表的な窯として篠岡2号窯¹²⁾が挙げられる。この窯は瓦を併焼する瓦陶兼業窯として生産を始める。器種構成を見てみると篠岡2号窯では主体となるのはかえりを有する蓋と杯身である。量はきわめて少ないものであるが杯Hも見られる。おおよその器形の変化は猿投窯に共通しているが、特徴的な透かしをもつ盤の存在に注目しておきたい。

d. 4期(7世紀末~8世紀初頭)

この時期には猿投窯岩崎41号窯式が含まれる。代表的な窯としては岩崎41号窯¹⁴⁾が挙げられる。器種組成では杯蓋でかえりがつく形態のものが少なくなり、口縁端部を折り返す形態のものが主体となる。杯Bの中には底部が高台より突出する形態のものが顕著にみられる。高杯は組成比率が大きく減少する。新たに有台形態の皿Bが出現する。長頸瓶、平



-101 -

第2図 尾北窯の須恵器 (1/6)

瓶、腺の肩には稜が付き、腺、細頸瓶には高台がつく。

尾北窯ではこの時期の代表的な窯として篠岡78号窯¹³⁾が拳げられる。篠岡78号窯も瓦陶 兼業窯である。器種構成では杯Hはなくなり、かえりのついた蓋とつかない蓋がほぼ同数 見られる。灰層下層では前者の量が卓越し、上層では逆転する。おおよその器形の変化は 猿投窯と共通しているが、盤類や鉢・壺類にバラエティーがある。

e. 5期(8世紀前葉)

この時期には猿投窯Ⅲ期第 4 小期高蔵寺 2 号窯式が含まれる。代表的な窯としては良好な報告例が無いが、近年調査されたN N 288号窯が該当するものと思われる¹₅¹この時期になるとかえりの付く蓋がなくなってしまい、口縁端部を折り返すもののみになる。細頸瓶はいままでロクロ上で体部を横方向で成形していたが、この時期には縦にして成形している。

尾北窯ではこの時期の代表的な窯として、高蔵寺2号窯、3号窯¹⁷⁾が挙げられる。篠岡6号窯は瓦陶兼業窯で¹⁶⁾あるがこの時期に含まれると思われる。基本的な変化は猿投窯と同じである。須恵器ではかえりのつかない蓋は完全に消滅してしまう。杯類は径高指数により多様に器種分化する。特徴的なのは高蔵寺2、3号窯で金属器模倣タイプの椀・水瓶・鉄鉢や特殊な器形の椀がみられることである。

3. 生産内容からみた猿投窯と尾北窯

1. 須恵器に見られる特徴

いま、飛鳥時代の猿投窯と尾北窯に見られる須恵器の変遷についてみてきた。両者は基本的にはよく似ている点が多いが、相違点も幾つか見られた。以下、具体的に2つの窯群の須恵器自体の生産内容について検討してみる。

まず、一般的な器種について形態、技法の面からみると共通性が強く、型式変化もほぼ 同じである。猿投窯の無台杯身の方が若干丸みが強いが、バラエティーの中に消える差で あろう。

法量についてみると、高蔵寺 2 号窯の法量分化がきわめて激しいのが特徴的である。例えば杯Bでは口径が約28cmの杯B I から約11.5cmの杯B T まで8 つに分かれる¹⁸⁾ (第 3 図)。また、同じ口径でも器高により高低があるものがある。これに対して猿投窯で時期的に平行関係にあると思われるNN288号窯では法量分化に乏しく、特に有台杯身ではほぼ単一の法量である。高蔵寺 2 号窯とNN288号窯の法量のあり方の差を単に 2 つの窯の差ととるのか、尾北窯と猿投窯との関係で考えるのか調査例が少なく、判断するには難しい問題である。該期の集落から出土する須恵器からみると有台杯身の法量は15cmのものが主体で20cmを超えるものはほとんど無く、19)NN288号窯の様相に近いものがある。高蔵寺 2 号窯のものを超えるものはほとんど無く、19)NN288号窯の様相に近いものがある。高蔵寺 2 号窯のもの

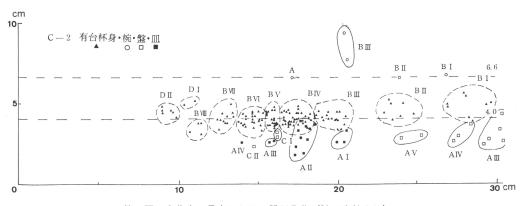
には口径が20cmを超える大型のものが多数あり、口径約28cm (約9.5寸) のもの、口径約24cm (約8寸) のグループに分かれている。これらはすべて蓋を伴うもので、平城宮などに例 がある。このような大型品の存在は尾北窯のなかでも特殊である。しかし、全般的に尾北窯の方が法量分化が豊富である。

器種構成の点から見ても一般的な器種は同じである。ただ、尾北窯における盤・皿類の 充実が挙げられる。猿投窯では基本的に無台盤がほとんどで、量的にも少ないのに対し、 尾北窯ではⅢ期の生産再開当初から無台のもの・高台のついたもの・脚のついたものなど 多種類の盤が見られる。篠岡2号窯では脚のついたものの中に複雑な透かし模様をもつも のなどがあり、一般的な用途が考えられない。盤のような大型の供膳具はむしろ用途も特 殊と考えた方がよい。

次に、特殊な器種についてみてみると若干の差がある。

斎藤孝正氏は金属器を模倣したものが尾北窯で多いとされている200金属製仏器については椀が主体で、すでに6世紀代には大陸から日本に入ってきており、全国の古墳などに副葬されている。7世紀になって、仏教文化の流入や半島との交流にともない、佐波理椀・鉢・水瓶などが多数もたらされる。これらの形態を取入れ、金属器指向型として土師器・須恵器の形態も大きく変化したという見解が一般的になりつつある200確かに、金属器を直接模倣した器形はいくつか存在する。これらは形態だけでなく、整形・調整が丁寧で、他の器種とは明らかに違っているのが一般的である。

尾張に見られる金属器模倣タイプの器種としては蓋・椀・鉢・水瓶等があるが、量的には少ないものである。ただ、特徴的なものを挙げると蓋(第2図-23)がある。整形・調整は丁寧で、鈕の部分がやや厚めの宝珠形である。このような鈕は他の杯蓋などには全く見られない形態である。天井部は偏平で、凸線が一条巡っている。口縁部はきわめてシャープに折り返している。このような形態の原形となった金属器は法隆寺献納宝物に見られ



第3図 高蔵寺2号窯における器種分化(註18文献より)

る佐波理蓋²²⁾である。この蓋は白鳳時代にさかのぼるものであると考えられており、時期的にも一致する。この例はきわめて忠実に金属器を模倣した例で、猿投窯・尾北窯に共通して見られる。尾張において特徴的な器形であり、工人集団の系譜を考える上で手がかりになるものと思われる。時期的には3~5期、7世紀後葉から8世紀前葉頃に限られる。 校については尾張国では極めて少ない。無台の椀が若干見られるのみである。そのほか高蔵寺2号窯で見られる有台椀について、金属器模倣形態と考える意見もあるが²³⁾その原形となる金属器が見あたらず、他にも類例がないことなどから、金属器模倣形態であるかどうかは保留しておきたい。鉄鉢は2期から出現するもので、この時期の窯には比較的よくみられる器形である。高蔵寺2・3号窯は量的に多い。そのほか、水瓶については該期では高蔵寺2・3号窯のみにみられるものである。猿投窯では時期的に少し遅れて8世紀中葉ごろから出現する。

金属器模倣について見るならば、高蔵寺 2 ・ 3 号窯の状況を除くと猿投窯と尾北窯には 大きな差は特にないものと思われる。これは金属器模倣ということがきわめて特殊なこと ではなく、かなり一般化した現象であることの現れであると解しておきたい。

そのほかの器種では、たとえば、硯についてみてみると猿投窯の硯が長条形の透かしを持つオーソドックスな円面硯が多いのに対し、尾北窯の硯は蹄脚式円面硯、有孔把手付円面硯、新羅などにみられる三足の獣脚硯など多様のものが見られる。蹄脚式円面硯は官衙などに多く出土するものとされている²⁴)有孔把手付円面硯は時期的に最も遡るものが7世紀前半に九州牛頸古窯跡群から出土している。出土状況については楢崎彰一氏がまとめられているが、近年さらに出土例が増加し、九州から静岡県にいたるかなりの地域に見られるようになった²⁵)管見では九州や近江に多くみられる。

全体的にみれば、集落から出土するような杯・壺・甕といった一般的な器種については 尾北窯、猿投窯には大きな差異はなかった。差があったのは大型供膳具である盤や特殊品 である硯・水瓶といった器種で、これらの器種が尾北窯に比較的多かったように思える。 特に高蔵寺 2 、3 号窯では器種分化や金属器模倣形態など特殊な要素がきわめて多かった のが特徴的である。

2. 瓦生産について

次に2つの生産地の大きく違う点として瓦生産が挙げられる。尾張国において飛鳥・奈良時代に瓦を生産したことがわかっている窯は現在、瓦窯5基及び瓦陶兼業窯4基である²⁶⁾ このうち瓦窯2基と瓦陶兼業窯4基すべてが尾北窯(春日部郡)に存在する。残りの3基の瓦窯は単独で操業している大山市官林瓦窯(丹羽郡)、名古屋市若宮瓦窯(愛智郡)、知多郡南知多町奥田瓦窯(智多郡)である。

現在、尾張で見つかっている瓦窯・瓦陶兼業窯のなかで最も古いグループは3期に属するもので、瓦陶兼業窯である篠岡2号窯が挙げられる。この窯の単弁蓮華文軒丸瓦は奥山久米寺のものと同笵であるとされている。笵傷などから奥山久米寺のものが直接、篠岡2号窯にもたらされたものである²⁷⁾と考えられる。製品の主たる供給先として東畑廃寺などがある。東畑廃寺は後に国府・国分寺が置かれることになる稲沢市にあり、当時の中心的な寺院であったものと思われる。それに続いて構築された篠岡78号窯も瓦陶兼業窯であったが、供給先などは分かっていない。5期の高蔵寺2号窯式になると尾北窯篠岡66号窯で瓦陶兼業窯が営まれているほか、少し東に位置する高蔵寺地区に高蔵寺瓦窯・白山瓦窯が出現する。高蔵寺瓦窯からは勝川廃寺などに製品が供給されているが、なかに藤原宮式6233Ac型式と同笵の瓦が出土している。この瓦は藤原宮造営のために築かれた日高山瓦窯の製品と同笵であると考えられ、笵傷などから直接高蔵寺瓦窯にもたらされたものと想定されている。瓦窯の構造が煉瓦積みの平窯で、日高山瓦窯に似ていることなどから、笵型のみでなく工人が直接移動していることも想定される²⁸⁾残りの1基は篠岡74号窯で時期的に8世紀中葉に近い時期であると思われる。

このように瓦の流れを見るとそれぞれの時期に中央から尾北窯へダイレクトに笵型が動いている。高蔵寺瓦窯のように直接工人がやってきたと想定できる瓦窯もあり、中央との結び付きの深さが想定される。

それに対して、猿投窯には古代の須恵器窯が約200基存在するが、基本的に瓦窯・瓦陶兼業窯は存在しない。周辺には尾張国分寺や国分寺元興寺などに瓦を供給していたことがわかっている若宮瓦窯が1基存在するのみであ

る。尾張国の古代寺院の数に対して、瓦窯の数がきわめて少なく、さらに見つかる可能性はあるが、猿投窯は基本的には瓦は焼成していないものと考えてよい。

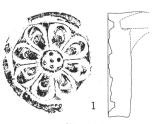
瓦の生産では対称的な様相をみせる。

4. 猿投窯・尾北窯の性格づけ

1. 文字資料からみた尾北窯

近年、飛鳥地方で宮都とも関連した遺跡である石神遺跡から次のような線刻文字を持つ 須恵器が出土した²⁹⁾

「尾山寸」 横瓶体部



(篠岡2号窯 註5文献より)



(高蔵寺瓦窯 註28文献より)

第4図 尾北窯出土軒丸瓦(1/6)

「山寸」

横瓶体部

「久」

杯底部

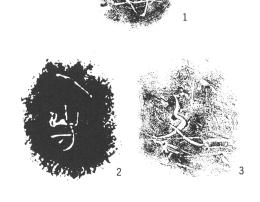
「尾」は尾張の省略と考えられる。「山寸」をどの様に解釈するか難しい。「山寸」を一字で「寺」と読むという見解もあり、書き方からすると一字で「寺」と読む解釈の方が妥当性があるかもしれない。この場合、「寺」の造営と須恵器生産が何らかの関係を持っていたことになり、また、製品の流れから寺院造営と中央との関連も考えられる。「久」については不明である。これと全く同じ内容と字体の線刻を持つ須恵器のセットが尾北窯篠岡78号窯から出土している。篠岡78号窯のものは4点あり、横瓶体部に「山寸」と記された須恵器以外ではいずれも杯底部に書かれたもので、「尾山寸」「山寸」「久」が各1点ある。胎土・焼成などを見ても同じである300従って、篠岡78号窯から運ばれたことは確実である。石神遺跡のものは飛鳥IV・V式の土器に伴って出土していることから7世紀後葉~末が考えられ、時期的にも一致する310

しかし、このような刻字を持つ類例がもう1片ある。それには次のような文字が刻まれている。

「尾治山寸□」

この書き方は「尾」の後に「治」が入り、「尾治[張]」+「山寸」+□□と表記されることである。「山寸」を「寺」と読むと「尾張寺□□」となる。この場合、尾張寺が非常にあいまいなものとなることや高蔵寺 3 号窯から「尾 (張) 春部 (郡) 岡本 (里)」といった「尾」+地名を表す資料の存在などから、「山寸」を 2 字として地名を表すものと解した方がよいのかも知れない。

この須恵器は三重県四日市市の西ヶ広遺跡から出土したもので、変の頸部にかかれたものである。西ヶ広遺跡は7世紀末から8世紀初頭にかけての倉庫5棟を含む比較的整った掘立柱建物を中心とする集落遺跡である。刻字を持つものは土坑SK88から出土したが共伴する硯は新羅から出土したが共伴する硯は新羅から出土するものに似ており、注目される遺跡である。報文ではなんらかの公的な性格をもつ遺跡であると考えられて32)



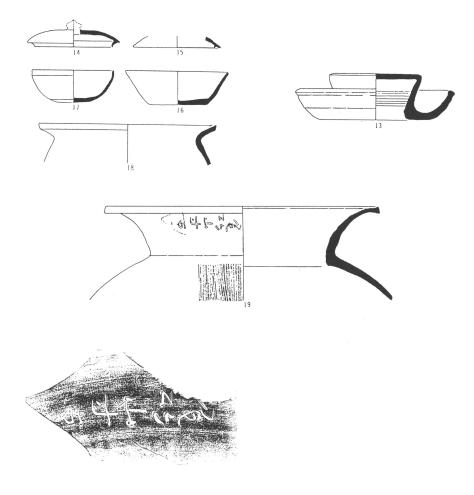
第5図 篠岡78号窯出土文字陶片(1/2)

おり、地方官衙と考えてよいかもしれない。

この須恵器を篠岡78号窯を含む尾北窯の製品と考えた場合、飛鳥地域中枢部だけでなく、 国境を越えて公的な性格を持つ施設にも製品がもたらされていたことになる。刻字を持た ない須恵器についても飛鳥地域では尾北窯の製品と思われるものが出土している。流通と いう点をとりあげても、尾北窯と中央とのつながりは濃厚である。

2. 飛鳥時代須恵器生産の特質

飛鳥時代における須恵器生産について、基本的な器種を見る限り、猿投窯と尾北窯には 大きな差は見られなかった。このことから器種分化の激しい高蔵寺2号窯のあり方を別に すれば、飛鳥時代の尾張における須恵器生産は基本的には在地向けの生産を基盤としてい たものと考えられる。ただ、これに特殊な用途をもつ生産が加わるという二重構造的な生



第6図 三重県西ケ広遺跡出土遺物(註32文献より) 1/6(拓本は1/2)

産が行われていた。これは尾張のみにとどまらず全国的にも当てはまることであると思われる。官衙遺跡等で使用される須恵器の形態が一般集落のものと比較して特別であるということはないので、実際に両者を峻別することは難しいことである。区別する要素としては法量分化と大型の杯・盤などの大型供膳具、硯などの特殊な器形が挙げられる。全体的に見て尾北窯は後者の部分の比重が高かったのではないだろうか。

積投窯は開窯時には埴輪を併焼しており、須恵器生産には在地豪族の関与があったと思われる。丘陵端部に位置する猿投窯東山地区の生産に関わったのは西に広がる平野部先端にある熱田台地上に古墳を築いた勢力が想定される。具体的には当時尾張国造で最大の勢力であった尾張氏を想定する意見がある³³゚゚な投窯は形態・技術的にもきわめて個性的、保守的な面がある。例えば杯Hの天井部の回転ヘラケズリ調整や稜線が最後まで残る点などに現れている。このような体質は飛鳥時代になっても残り、基本的には同じ体制で生産を続けていたものと考えられる。

一方、7世紀後葉の尾北窯篠岡地区の開窯³⁴)に際しては瓦陶兼業窯という新しい形態をとること、しかも瓦の笵型の移動にともなって中央より瓦の生産技術の移入があったことが考えられる。この技術にともなって瓦工人も中央より導入している可能性がある。しかし、須恵器については基本的には猿投窯と同じであり、開窯にあたって猿投窯から須恵器工人を導入していたことが想定される³₅う流通から見れば、尾北窯の製品は開窯当初から飛鳥地域中枢部や伊勢国の公的施設などに運ばれている。これらのことから尾北窯は中央と極めて強いつながりを有していたことがわかる。ただし、この時期の寺院があくまでも豪族の氏寺であることなどから、生産に直接、中央の勢力もしくは地方の公的機関が関わっていたと考えるより、中央と結びつきの強い地方豪族を介してと考える方がよいと思える。

以上、猿投窯と尾北窯における須恵器生産についてみてきた。生産内容でいえば、須恵 器自体に大きな差はなかったが、性格に隔たりがあった。

猿投窯は灰釉陶器発生の地として注目されるが、その前の段階である飛鳥時代ではただの在地向けの生産が主流の地方窯であった。それに対して尾北窯は中央と結び付いた形で瓦を含めた生産を行っていた。ところが、8世紀中葉をさかいにして尾北窯の生産は急激に衰退し、逆に猿投窯では新しい技術革新がおこり、原始灰釉が開発されると共に須恵器生産は急激に増加することになる。尾張では8世紀中葉に猿投窯の古い体質が解体し、尾北窯のあり方が否定され、新たな生産体制が再編成されるという大きな画期が訪れることになる。

今回の検討では同じ国のなかに存する2大生産地について生産内容・流通などから、その性格の差などについて考えたものである。両者の差についてはある程度あきらかになっ

たが、その背景にあるものについは論及できなかった。この課題は窯の分布状況等も含めて検討すべきである。また、工人組織の問題等にも触れることはできなかった。これらの問題については後日改めて論じてみたいと思う。 (1993. 2.20)

謝辞

本稿を草するにあたり、次の諸氏より種々の御教示を頂いた。深く感謝の意を表する次 第です。

伊藤久嗣、宇野隆夫、尾野善裕、斎藤孝正、柴垣勇夫、巽淳一郎、中嶋隆、楢崎彰一、 西口寿生、服部哲也、舟山良一(五十音順、敬称略)

註

- 1) 飛鳥時代という用語については美学・美術史や文化史の分野などで7世紀前半を指す場合がある。しかし、本稿では史学の通説に従い、推古朝の成立 (592年) から平城京の成立 (710年)までを指すものとする。
- 2) 岩野見司1987「古代の寺院跡」『新編一宮市史本文編上』
- 3) 山崎信二1981「軒瓦の考察」『尾張勝川廃寺範囲確認調査概報』春日井市教育委員会
- 4) 田中琢1984「古代窯業の展開」『講座・日本技術の社会史 4 窯業』
- 5) 斎藤孝正1990 「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一様相-篠岡2号窯出土資料を中心として-」『名古屋大学文学部研究論集107』
- 6) 楢崎彰一1958「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』をはじめとし多数の業績があるが、現在一般的なものとしては楢崎彰一・斎藤孝正1983『愛知県古窯跡群分布調査報告書』Ⅲがある。本論もこの編年を参考とした。
- 7) 小島一夫1979 『光真寺古窯址発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 8) 基本的に器種の名称は供膳具では飛鳥・平城宮報告の中での分類の記号を用いることとする。 (奈良国立文化財研究所1978『平城宮跡発掘報告WI』などによる。)
- 9) 名古屋市教育委員会1980『H-15号窯発掘調査概要報告書』
- 10) 尾張では飛鳥編年で用いられる杯Gという有蓋の形態が不明確で、杯Aとの形態の相違がはっきりしない。従って、ここでは無台杯身の形態をすべて杯Aとする。
- 11) 楢崎彰一1958『猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 12) 大参義一・山田友治1967『東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告 篠岡 2・44号窯』 愛知県教育委員会
- 13) 中嶋隆1979「桃花台ニュータウン発掘調査報告II」小牧市教育委員会
- 14) 註11文献
- 15) 名古屋市見晴台考古資料館尾野善裕氏の御教示による。尾野氏のご厚意により遺物を実現したが、大型の供膳具はほとんど見あたらなかった。
- 16) 立松宏他1976「桃花台ニュータウン遺跡調査報告 小牧市篠岡古窯址群」小牧市教育委員会
- 17) 楢崎彰一1959『猿投山西南麓古窯址群』愛知県教育委員会
- 18) 城ヶ谷和広1984 「七、八世紀における須恵器生産の展開に関する一考察~法量の問題を中心に~」『考古学雑誌』70-2
- 19) 城ヶ谷和広1989「名古屋城三の丸遺跡出土の奈良平安時代土器」『㈱愛知県埋蔵文化財センター年報-昭和63年度』
- 20) 註 5 文献
- 21) かつて西弘海氏の提唱した金属器「指向」型(西弘海1982「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古希記念論集 考古学論学』)と忠実に金属器を模倣した金属器「模倣」型とは近年混同して使われる傾向にある。金属器指向はあくまでも金属器のもつイメージを追求するものであり、必ずしも全ての形態的な類似は必要ない。金属器模倣についてはモデルとなる金属

- 器の形を忠実に模倣するもので、区別されるべきである。
- 22) 東京国立博物館1979『法隆寺献納宝物目録』
- 23) 註5文献
- 24) 楢崎彰一1982「日本古代の陶硯-とくに分類について-」『小林行雄博士古希記念論集 考古 学論考』
- 25) 楢崎彰一1984「神屋1号窯出土の把手付円面硯」『春日井市遺跡調査報告8』
- 26) 名古屋市博物館編1985『尾張の古代寺院と瓦』
- 27) 註 2 文献
- 28) 梶山勝1983「春日井市高蔵寺瓦窯の再検討」『名古屋市博物館研究紀要 6』
- 29) 奈良国立文化財研究所1991『藤原宮と京』
- 30) 実物については小牧市教育委員会中嶋隆氏のご厚意で実現することができた。
- 31) 奈良国立文化財研究所西口寿生氏のご教示による。なお実物については西口氏の厚意で実見することができた。観察によると胎土などが篠岡78号窯のものに極めてよくにている。
- 32) 児玉道明他1970「西ヶ広遺跡」『東名阪自動車道関係埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 実物については三重県教育委員会伊藤久嗣氏のご厚意により実見することができたが、胎土などから尾北窯産であるものと思われる。
- 33) 浅田員由1989「猿投窯における生産構造」『愛知県陶磁資料館研究紀要 8』
- 34) 同じ尾北窯の範ちゅうにある下原地区の開窯に当たっては、やはり埴輪との併焼から豪族との 関連が想定される。しかし、その後6世紀中葉から約100年間の中断期間があり、後の篠岡窯との 関連を考えるのは難しい。従って本論では下原地区と篠岡地区を区別して考えることとする。
- 35) 尾張の場合は田中琢氏の指摘された瓦工人と共に新しい須恵器製作技術が導入された可能性は 少ないものと思われる。
- 36) 名古屋市見晴台考古資料館1981『館蔵品目録II』